昭和59年2月1日

No.63

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号　TEL0952(24)3947

自然石図像板碑

杵島郡大町町福母字中島

板碑は死者の追善供養のため、又は生きている者が後生安楽のために供養の意味で造立したものである。この板碑は今、中世末の五輪塔と共に道路脇の空地で祀られているが、以前は近くの墓地に建っていたというから死者の追善のために造立されたのであろう。粗割りで尖頭形をした板状自然石の碑面中央には、蓮華座上に結跏趺坐した地蔵が描かれている。

本地蔵は錫杖を右手で執り、左手は腹前に上げて宝珠を捧じて坐す通形のものである。その彫技は蓮台や肩から上方の輪郭だけを線彫りし、他に衣の襞等は帯状に陽刻、頭部や眉・目・鼻も共に陽刻して表現する特徴ある手法をとっている。

なお、本板碑には南北朝時代の「応安六（一三七三）　三月　八日　法満寺　沙門覚秀」の銘が刻まれている。無銘の多いこの種の板碑の研究にとっては、制作された時代を測るに基準となる貴重な資料である。

目　次

○自然石図像板碑……1
○観応3年銘　自然石種子板碑……2～5
○野田家日記にみる天文現象など……6
○県内博物館案内その16……7
○行事案内・博物館日誌……8

資料紹介　観応３年銘　自然石種子板碑

所在地　佐賀県東松浦郡浜玉町大字五反田821番地
（玉島小学校々庭）

位　置

本板碑は玉島小学校々庭の拡張工事中、現運動場のほぼ中央部に碑面を上にして浅く埋っているのを発見された。ここは脊振山地の西北端、城山の南東麓で、唐津平野では東端に位置しており、また、脊振山地から西へ流れ、山を下って平地をはい唐津湾へ注ぐ玉島川の河口からさかのぼること約2.7km、一番奥まった平地の右岸に在り、『類聚三代格』にみえる弥勒知識寺跡と推定される寺域の一隅に当たるものとみられる。

板碑の概要

石材は花崗岩である。花崗岩は脊振山地の母岩を成す岩石であり、出土地の背後や前面の山地および玉島川の河床から多量に産出する。古墳時代後期の横穴式石室の用材としても、これが多く用いられた。

板碑は概、縦長の形状をした自然石であるが、上縁を荒く欠き取って長方形状に整えている。その割れ口は一見新しそうに思えるが、薬研彫りされた種子やその他の文字の彫り口に見られる風化の状況と同様に見なされるところから、これが板碑造立時の形とみてよかろう。左縁（向って）の一部が欠損しているが、これは発見後、掘り起こして現地から移動させるに際しユンボ使用によるものである。

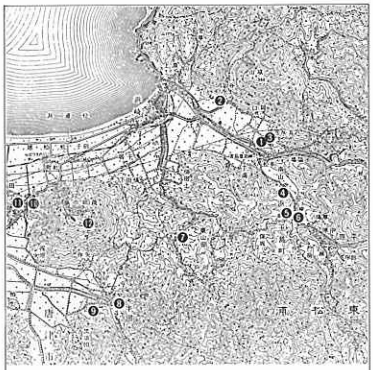
法量は、総高96.5cm、中央部幅58cm、中央部最大厚さ23cm。

碑面に当たる平滑な自然石面の上方には、大ぶりの月輪の中に（直径36.5cm）（キリーク・阿弥陀如来）の種子が薬研彫りされている。彫りは浅いが肉太の（縦画の幅3.3cm）種子で手本の如く均整がとれており、南北朝時代の特徴をよくあらわしている。

種子の下方には行書体で五行にわたり下記の銘が陰刻されている。

奉造立石塔
右為僧朗麗カ
逆修敬白
観応三年辰壬
十月三日

銘文は種子を囲む月輪の下方の弧に、各行の頭に当たる第１字の位置を添わせて書き出しているが、行の短かい５行目を除き末尾の文字右４行目までを横一線に揃えている。それは、銘文の末字下方約27cmが基礎として地中に据えられるために、文字が不揃いであれば土中に一部隠れることも予想されるので、銘文を地上に出す配慮が文字の配列をそうさせたものと考えられる。したがって本板碑は建立頭初、銘文の下方約27cmが据えつけのため埋められていたとみることができると思う。



遺跡周辺の主な仏教遺品等所在地

1　観応３年銘自然石種子板碑
2　応永20年銘自然石彫像（地蔵）板碑
3　弥勒知識寺跡（現大村神社一帯）
4　市丸経塚（藤原時代）
5　タコラ山経塚（藤原時代）
6　殿原寺　木造菩薩立像５軀（藤原時代）
7　常福寺　木造薬師如来坐像他（藤原時代）
8　勝楽寺　朝鮮鐘　応安７年（1374）寄進
9　半田桜崎蔵骨器群（奈良～平安時代）
10　恵日寺　木造阿弥陀如来立像（鎌倉時代）朝鮮鐘
11　鏡神社　経塚群（藤原時代）
　　楊柳観音像図　明徳２年（1391）寄進
12　愛染院　木造天部形立像（藤原時代）

考察

板碑は弥勒知識寺跡の一隅から出土したものと考えたい。その意義を知るために先ず弥勒知識寺について述べねばならぬが、これには弥勒知識寺は転退して知識無怨寺となり、明治初期まで存続したという松岡史氏の詳しい論考①があるのでその概要をここに紹介する。

弥勒知識寺は『日本書記』・『三代格』・『東大寺要録』に記載された松浦郡唯一の奈良時代建立の寺院であった。これによると天平17年（740）に聖武天皇の勅願によって僧20人、水田20町をもって東大寺末寺として成立している。ところが約100年後の承和２年（835）８月25日の太政官符によれば「……縊死（くびし）に尽くし、田寺空しく存し修行の跡絶えたり……」[2]と評されるようになり、寺運も衰退の極にあったものとみられる。更に、同太政官符によれば、大宰府観世音寺の講師光豊が当寺院を修理復興し、国は僧５人を置いて鎮護国家・怨霊鎮撫の祈願をさせたことが知られる。古代における弥勒知識寺の寺歴は以上の様であるが、以降、公の記録から姿を消してしまう。

だが、鏡神社（唐津市鏡）の『松浦廟宮先祖次第并本縁起』を信ずるならば、弥勒知識寺は神宮知識無怨寺や神宮無怨寺の名称でみえ、鏡神社の神宮寺として営まれている。このようにして中世以降も鏡神社との関係を保ち、明治初期まで存続したものと考えられる。と述べておられる。

松浦廟宮先祖次第并本縁起は無怨寺の前身が弥勒知識寺であると推定させることを記しているが、所在地の比定についても確たるものがなかった。だが、先の松岡氏は浜玉町大字五反田を踏査されて、現在の大村神社一帯の地域を推定[3]しておられる。即ち、ここの境内からはこれまでに礎石や奈良・平安時代の瓦片及び土器片が出土しており、神殿北側には土塁と推定される遺構もあり、大村神社一の鳥居付近には「大門」という地名も遺っていて古代寺院の存在の可能性を示唆しているからである。

藤原時代の末期、文治２年（1186）に至り筑後に在った草野永平は源頼朝の幕府設立に力したため、その功により鏡社宮司に補任され、松浦郡の東郷を所領するようになった。この地域はこれまで松浦党が支配した所であったが、以後、草野氏と深いかかわりをもつようになる。実際、草野氏が鏡神宮司として筑後から松浦の地に移り住むようになったのは、永平の曾孫草野次郎経永の代に至ってからであるが、彼は居館を大村に構えた[4]という。以降、戦国時代末の天正15年（1587）、豊臣秀吉に亡ぼされるまでの約400年間、ここで繁栄した。

ところで、創建時の弥勒知識寺の規模については未調査で全く判っていない。だが限られた資料で無理な推論となるが、敢て推測すれば、大分県宇佐市の宇佐神宮境内に遺構をとどめている弥勒寺は、調査によって約150m四方の寺域が推定されるようになった。[5]いっぽう、肥前における弥勒知識寺は僧20人、水田20町が国から施入されているのに対し、僧20人・水田10町が施入され、方２町（216m）を有する国分寺[6]にも勝る厚遇を受けており、更には東大寺末として経営されていることをみれば、本寺域は肥前国分寺相当か、少なくとも宇佐弥勒寺相当のものであったと推察される。

平安期における転退はあったが次の鎌倉時代から南北朝時代にかけ弥勒知識寺は、韓半島の文物を多く請来[7]し、室町初期になると李朝政府の認める交易者として貿易に従事した草野氏の庇護のもとにあったであろう。この草野氏の往時の勢[8]を思うとき、寺はこれまでと同程度の規模を維持されていたのではなかろうか。これも推定の域を出ないが、板碑建立者が僧侶であることからして寺の境内かあるいは寺に隣接して板碑は建てられていたとみるべきであろう。これが、大村神社一の鳥居西方約100mの位置から出土したことは、その距離から推して方２町ほどの寺域を有していたことを示唆しているのではないか。であれば今日、中世におけるこの寺の歴史を徴する資料が皆無に等しいとき、南北朝中期、草野氏の庇護のもとで僧朗圓が法燈を守っていたことを証するものとなる。

次に本板碑の年号についてであるが、ここでは南北朝期の北朝年号「観応」が使用されている。詳しくは観応３年（1352）であるが、南朝方の年号でいえばそれは正平７年に当たる。

松浦東郷を領した草野氏は、南北朝時代に至り延元元年（1336）の多々良浜の戦を機に足利尊氏の北朝方についた。以降、この板碑が建立された観応３年までの間、残された記録ではおおむね北朝方として活躍している。その間の主な動向を挙げると、

「(延元元年) 4月3日、足利尊氏将軍進発し、舟纜を博多津に解く。千葉・松浦九州の諸侯大半之に従う。」(『鎮西要略』)

とあり、草野氏は本来松浦党とは異なるが、この頃は松浦党と組みし、尊氏の宮方への反攻に当たり多大の援助をしたとみてよかろう。そして、京都へ攻め上ってからもその奮戦は目覚ましく、とりわけ鏡大宮司草野季永は宮方の有力な武将であった名和長年を討ち取っている。即ち、

「(延元元年) 6月、名和長年、猪隈 (京都三条) に掛る。肥前国鏡城草野季永名和長年を討ち捕る。」(『鎮西志』)

とある。

正平4年 (1349) ころになると、尊氏と弟直義の不和、九州探題一色範氏と少弐頼尚の不和があり、これに尊氏の養子直冬が介在して九州は尊氏 (将軍方)、直冬 (佐殿方)、菊池(宮方)の三勢力に分裂した。その間にあって、

「(観応元年) 2月足利直冬、肥前塚崎武雄社永島庄宮裾に至る。一色直氏、直冬・頼尚退治の為下向、肥前松浦大村に至。」(『鎮西志』)

とあり、将軍方である一色直氏が草野氏の居館の地大村に向ったことは、草野氏の将軍方との結びつきが考えられる。だが翌年になると

「正平6年 (北朝・観応2年) 4月、菊池伝記ニ曰、此頃北朝ヨリ鎮西ニ置タリケル一色右馬頭入道道猷・同左近大夫直氏・同右馬助範光及ビ草野・松浦以下ノ者ドモ、師直ガ下知ニ従ヒ九国ニ居給フ足利直冬ヲ討取ルベシト彼地ニ攻寄ス。直冬ニモ之ヲ聞キ小弐・大友ガ兵ヲ伴ヒ防戦セラルルニヨリ、数日ニ及ビテ勝敗ヲ決セズ。同10月17日、九州ノ一色ガ許ヨリ飛脚京師ニ到来シ、大友・小弐・松浦・草野、足利直冬ニ与党シ、其威ヲ振フ所ナリ、早ク討手ノ勢下向アルベシト告タリケル」(『南山巡狩録』)

とみえ、草野氏は正平6年4月までは将軍方にあって高師直の命に従い行動するが、半年後の10月には将軍方から離脱して立場を替え、佐殿方について将軍方と敵対していることを伝えている。

だがその戦は

「当月、北朝ヨリ置カレケル鎮西ノ探題一色入道国中ノ乱ニ依テ、肥前国草野城ニ楯籠ル」(『南山巡狩録』)

こととなり、将軍方の一色氏に草野氏は城を追われており敗北したのであろう。

本碑の北朝年号であることは、その頃、草野氏が北朝方として行動したことを証明する現地に残された貴重な資料であるといえる。

なお、この碑が建立されたのは観応3年10月3日であるが、実は前月の9月27日に改元され、文和元年となっている。6日前のことで、朗𦬊はそのことを知るよしもなかったであろう。

本碑の造立の目的は、銘により僧朗𦬊の逆修碑であることが判る。逆修とは

「若し男子・女人ありて在生に善因を修せず、多く衆罪を造らんに命終の後、眷属小大、為めに福利を造るとも一切の聖事は七分の中にして而かも乃ち一を獲んのみ、六分の功徳は生者自ら利す、是を以て未来・現在の善男女等、聞健なる時自ら修すれば分々已に獲」(『地蔵本願経 巻下』)

と説かれているように、本人が仏の功徳を全て得る七分全獲のため、生存中に予め仏事をおこなうことである。

また、この板碑には阿弥陀如来の種子𑖀が彫られている。弥陀の種子を彫ることは弥陀の姿やその本願をあらわすことであり、したがってこの種子には弥陀の無量の徳が包蔵されているというのである。

朗𦬊は弥陀の本願にすがって極楽往生を期し、弥陀の功徳を一身に得るために板碑を建立して逆修供養をおこなったのである。県下の金石文中、「逆修」の銘が出現するのはこれが初例である。逆修供養の流布を知る上からもこの板碑のもつ意義は大きい。

なお、県下の在銘板碑中でも最古のものである。以下、

これまで判明している14～15世紀の在銘板碑の地名表⑨　を掲げておく。

佐賀県下の板碑所在地名表（14～15世紀）

西　暦	紀　　年	種　　別	所　　在　　地
1352	観応３年壬辰10月３日	自然石種子（阿弥陀）板碑	東松浦郡浜玉町大字五反田
1369	正平24年	自然石種子（釈迦）　板碑	西松浦郡西有田町大字大曲字下本村観音堂（現存せず）
1373	応安６年３月８日	自然石彫像（地蔵）板碑	杵島郡大町町大字福母字中島
1391	明徳２年２月日	自然石彫像（地蔵）板碑	三養基郡北茂安町大字千栗大師堂
1398	応永５季戊寅２月日	自然石彫像（地蔵）板碑	三養基郡基山町小倉伊勢前
1395～1429	応永（以下折損のため不明）	自然石彫像（地蔵）板碑	三養基郡北茂安町西尾観音堂
1413	応永20年	自然石彫像（地蔵）板碑	東松浦郡浜玉町大字谷口
1414	応永21年８月日	自然石種子（大日）板碑	武雄市橘町北楢崎ドウザマ墓地
1422	応永29年10月吉辰	自然石線刻像（地蔵）板碑	藤津郡塩田町下野辺田　筒井氏宅
1424	応永31年甲辰２月18日	自然石彫像（地蔵）板碑	三養基郡北茂安町中津隈墓地
1443	嘉吉３年	類形種子（胎蔵界大日）板碑	神埼郡三田川町吉野ヶ里石塔院
1450	宝徳２年８月14日	類形種子（胎蔵界大日）板碑	神埼郡三田川町吉野ヶ里石塔院
1485	文明17年林鐘初□日	自然石種子（釈迦）板碑	武雄市朝日町川上

板碑が出土した玉島小学校
写真中央に見えるイチョウの木付近が大村神社境内

大村神社

注①　『唐津市史』　唐津市史編纂委員会　1962
　　『未盧国』　唐津湾周辺遺跡調査委員会　1982
②　『類聚三代格　巻三』
③　注①に同じ
④　五反田には「館（たち）」の地名が残っており、ここか草野氏の居館のあった所と推定される。
⑤　小田富士雄「弥勒寺跡の調査」『九州考古学研究』歴史時代編　学生社
⑥　高島忠平他『肥前国分寺跡』　大和町教育委員会　1976
⑦　鏡神社には韓半島から請来された絹本着色楊柳観音像・紙本墨書法華経が所蔵されている。また恵日寺にも朝鮮鐘があり、勝楽寺にも現存しないが朝鮮鐘が寄進されていた。そのほか唐津市山田の薬師堂には銅造如来坐像がある。いずれも高麗時代のものである。
⑧　松岡史「九州の韓式鐘」『大宰府古文化論叢』下巻　1983
⑨　松岡史氏のご教示によるところが多い。

参考文献

『佐賀県史』上巻　佐賀県史編纂委員会　1970
山崎猛夫『七山村史』　七山村史編纂委員会　1975
本文に記した『鎮西志』と『南山巡狩録』と、その論考は七山村史によるところが多い。
『松浦叢書』第二巻　吉村茂三郎　1974

企画普及係長　志佐憚彦

資料紹介　野田家日記にみる天文現象など

「野田家日記」については、西日本文化協会から三好嘉子氏によって出版されている。野田家は小城郡牛津町の商家で「野田家日記」は安永元年（1772）から安政五年（1858）までの87年間にわたって、当主の野田新兵衛、その子の新吾兵衛によって書きつづられたものである。記載されている内容は家の内部の個人的な記事ばかりではなく商売、とくに金銀、米麦の相場、農作物の値動きや、祭礼、芝居、すもうなど社会一般の大小、様々な出来事をもくわしく記入してあって、庶民の生活史として史料価値の高い日記である。

その他火事、風水害、流行病、とくに文政11年８月（1828）のいわゆる「子年の大風」の被害については牛津町ばかりでなく藩内の様子がうかがえる記事内容である。ここでは主として天文現象の、目新しい記事などについて原文を記載して注を加えて解説してみた。

文政７年（1824）

十二月中比大雪也、近年無並雪也、凡弐尺余リノ雪、十五日共ハ一日不止、十八日より正月ノ節ニ成ル、

12月は太陰暦であるため現在の１月と思われるが約２尺（約60センチ）の雪が降っている。15日は一日中降り止まずに降っている。牛津で60センチの大雪は例をみない大雪であったであろう。しかし当時は現在に比較して降雪の多い時代だったかも知れない。

文政八年（1825）六月朔日

えんどう豆ノ如き物ふる也、いわバかごのみノ様ニモ有ル、不思儀成ル事共也、

６月朔日というのは閏月がないとすれば現在の６月末か７月の初め頃と思われるが、えんどう豆大の物が降って来たと云うことは、雹だったと思われる。カゴノミとはヤマノイモのムカゴだろうと思う。もともとカゴとは和紙の原料である「こうぞ」の佐賀方言であってクワの実に近い実をつけるものであるが、ここではムカゴのことを指していることだろう。この時期に雹が降ることは珍らしい。雹としては大きいものではない。

天保二年（1831）

五月、目多原松原にて白雉子ヲ取ルト也、殿様ニ上ルト也、昔シケ様之鳥取リシ時萬作也とて、

目多原松原とは現在の神埼郡三田川町目達原であって江戸時代には目多原松原と言われ、広大な松原があった（明治四十年頃伐採している）。白雉子を捕獲して殿様に差上げている。シロキジは目出度い鳥、農作物が萬作、豊作、そして幸福をもたらす鳥として珍重されている。我が国の年号でも、白雉子がとれて朝廷に献上されたことを記念して、白雉（650～655）と制定されている。このようなニュースが藩内のニュースとして広く伝わったことがわかる記事である。

七月十三日、明て日輪様御光り無クして月ノ如シ、其色青くし而もよふなしし、朝四ツ時分迄、昼の時分ハ常ノ如ク御光り有リ而、七ツ時分より又元ノ月ノ如シ、如是なる事三ヶ日也、十五日迄、不思儀ノ事共也、

太陽が月のように光をなくして青い色をしてその模様が悪い。午前十時までつづいた。そして昼間は普通のように輝いたが、夕方の午後四時（夕七ツ）頃からまた月のような光になった。このようなことが15日まで３日間もつづいた。全く不思議なことだと記載されている。７月は現在の暦では８月の盛夏の頃で、強熱射光線のため高層の水蒸気による一種の天体現象と推定される。この現象の前後には大雨、大風はなく、稲も豊作であったことが記されており、一般の気象には影響はなかったようである。

嘉永元年（1848）

十一月十八日、暮六ツ半時、天火北より南へ飛渡ル、其光り月出たるごとし、牛津新町計りかと思ひの外、一時ニ佐嘉、神埼其東筑前、筑後、肥後、柳川、西ハ大村、平戸、唐津、九州路不残一同ニ飛渡ル、不思儀之事共也と、古今珍ら敷事也と、

11月18日は現在の12月中旬、下旬の頃だろうか、相当に大きい天火（流星）が北から南に飛行した。暮六ツ半と言うので現在の午後７時頃であった。牛津新町ばかりと思っていたところが人々の話では佐嘉、神埼、その東の筑前、筑後、肥後、柳川、西は大村、平戸、唐津でもみられている。いままでにない珍らしいことであったとの記事があるが、相当大型な流星であったろうと考えられる。隕石が落下とも想像したが、隕石には閃光、爆発、音、黒煙を伴うのが普通で、これにはその記録はないのでこの記事は大型の流星だったと思われる。

嘉永五年（1852）

三月四日八ツ時、日輪大成ル輪ヲかぶり給ふ也、惣し而日色黄色ノ如し、暫らくノ間也、不思儀成ル事共也、先達而二月、閏二月両度右ノ通リニ輪ヲかぶり給ふ、是レ迄三度、同六日、日輪右ノ通り輪ヲかぶり給ふ、其合ハ雨天ニて知れず

太陽が笠をかぶったと俗に云って、天候の悪くなる前ぶれとされている。閏のあった年であるから３月と云っても現在の５月か、６月の頃と思われる。記録によると15日夜から大雨となって、土井が切れ、麦、唐豆が浸水のため腐敗している。

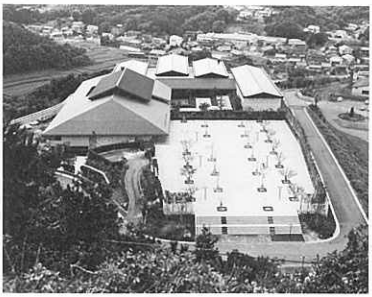
同十九日、又日輪大成ル輪ヲかぶり給ふ、大形毎日ノ様ニケ様ニ有ル時八日ノ色違

同月の19日にも太陽が大きい輪状の笠をかぶっている。そして毎日のようにこのような輪状の笠が出現すると太陽の色まで変ってくるようである。と記載されているが、太陽が輪をかぶる現象は現在でも時たま（数年に一・二回位）起こっている。

副館長　手塚静雄

県内博物館案内（その16）

佐賀県立九州陶磁文化館



○所在地　佐賀県西松浦郡有田町中部字田ノ平3100-1
○交通の便　国鉄佐世保線有田駅下車徒歩15分
○開館時間　午前9時～午後4時30分
○観覧料　一般150円（100円）　大学・高校生100円（70円）　中・小学生50円（30円）（)内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度別に定めます。
○休館日　毎週月曜日（当日が祝日の場合はその翌日）および12月28日から1月4日まで
○環境と歴史

有田町は県の西部、西松浦郡の東部に位置し、金山岳、黒髪山系の峰々により盆地状に形成された山あいの町である。窯元が100軒をこえ、70余年の歴史をもつ5月恒例の陶器市には大変な人出がある。〝やきものの町〟有田の歴史は近世にはじまり、豊臣秀吉の朝鮮侵攻に参加した鍋島直茂は朝鮮から多数の人を連行、そのひとり李参平が17世紀初頭、泉山の白磁鉱を発見し、上白川天狗谷に窯を築く。これが近世陶磁器を代表する有田焼の創始とされている。以来、有田焼の原料陶石を供給し続けたのが泉山石場で、300余年の長い間採掘した膨大な量は現地にたてば実感できる。このように日本磁器発祥の地有田の歴史を背景にし、昭和55年11月1日、佐賀県立九州陶磁文化館が開館した。昭和41年秋に有田焼創業350年祭が催され、その記念事業として有田に国際的なやきものの美術館建設が提唱されて以来14年ぶりにその構想が実現した。

当館は九州の陶磁器に関し、歴史的、美術的、産業的にみて貴重な資料を収集、保存、展示するとともに調査、研究、教育普及活動を行うことにより、文化遺産の保存と陶芸文化の発展に寄与することを目的として設立された陶磁専門の広域文化施設であり、陶芸文化に関する総合的拠点となることをめざし今後ますますの充実、発展が期待される。

○施設の概要
■敷地面積　32,469㎡
■建築延面積　5,966.89㎡
　1階　2,385.90㎡　　2階　3,354.71㎡
　3階　199.49㎡　　付属建物　26.79㎡
■構　造　鉄筋コンクリート造、地上2階・一部3階建
■建設工事費　1,685,600千円
■設　計　内田祥哉＋アルセッド建築研究所

○展示室
■第1展示室（一般展示室と茶室）
個展やグループ展に使われる一般展示室と、茶会・茶陶の展示等に使われる茶室からなる。

■第2展示室（現代の九州陶芸）
九州各県の優れた陶芸家の作品を展示。展示構成は県別となっており、地区ごとの特色を把握できる。茶陶や民陶、伝統的な作品や前衛的な作品などを展示。

■第3展示室（九州の陶磁）
九州各地の古陶磁を展示。古唐津をはじめ、初期伊万里・古伊万里・柿右衛門・鍋島などの他、長崎県の亀山焼・現川焼・平戸焼、福岡県の高取焼・上野焼・須恵焼、熊本県の網田焼・小代焼、鹿児島県の龍門寺焼・苗代川焼などを展示。

■第4展示室（固定展示室）
九州陶磁の源流である中国・朝鮮陶磁の絵年表から、日本陶磁の歴史パネル、古伊万里とオランダ貿易の特色など、九州陶磁について基礎的な知識が得られるような資料を展示。特に蒲原コレクションの輸出伊万里101点はこの展示室の目玉となっている。

主事　森永　茂

展示風景（蒲原コレクション）

博物館日誌（昭和58年８月１日～昭和59年１月31日）

８月３日　佐賀県勤労者美術展（８月７日迄）
８月10日　七夕書道展（８月14日迄）
８月18日　九州新工芸展（８月28日迄）
　　日韓文化交流展（８月28日迄）
９月６日　日　展（10月２日迄）
10月８日　美術館落成式
　　美術館開館記念展「近代・九州の洋画家たち」（11月６日迄）
　　「よみがえれ佐賀」展 開場式（10月16日迄）
10月19日　第４回佐賀県学生書道展（10月23日迄）
10月25日　九州博物館協議会学芸員研修会（10月26日迄）
10月28日　開館記念展「近代・九州の洋画家たち」１万人目入館者表彰
11月２日　学童美術展（11月６日迄）
11月12日　高等学校芸術祭開会式（11月20日迄）
11月15日　秩父宮妃殿下御来館
11月29日　佐賀県美術展（12月11日迄）
12月20日　ベルナール・ビュフェ銅版画を常設展一部として特設。
昭和59年
１月７日　「エジプトの美」展　開場式（１月29日迄）

行事のお知らせ

常　設　展

展覧会名	会期	内容	会場
佐賀県の歴史と文化展	10月８日～３月31日	佐賀県の地質や自然、先史時代から近代にいたる歴史と文化について、自然史・考古・歴史・美術工芸・民俗の各部門について、系統的に資料を展観。	博物館
近代の美術・工芸	12月20日～３月31日	郷土出身作家の彫塑・陶磁・染織・金工などの代表的工芸品をはじめ百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助、小代為重、高木背水などの近代洋画、副島蒼海、中林梧竹などの近代書を紹介。	美術館

企　画　展

展覧会名	会期	内容	会場
書初め展	２月８日～２月12日	小・中・高校生及び一般公募の書初め展	美術館
エマ会展	２月15日～２月19日	エマ会員の油絵、水彩画などの作品展	美術館
佐賀大学教育学部美術工芸科卒業制作展	２月22日～２月26日	佐賀大学の卒業制作品、絵画、彫塑、工芸の各部門を展示	美術館
九州グラフィックデザイン展	２月29日～３月４日	九州及び沖縄のグラフィックデザイン作家と一般公募による作品展	美術館

○当館発行の図録紹介

「売茶翁」図録

昭和58年３月に行われた「売茶翁展」に伴い刊行されたもので、白黒78頁に作品約100点を紹介するとともに、佐賀市蓮池出身の禅僧で茶により禅の心を説き煎茶道の基礎を築いた売茶翁の年譜、作品ごとの解説を加えて紹介。129頁。　頒価 1,200円

「近代・九州の洋画家たち」展　図録

昭和58年10月に行われた「近代・九州の洋画家たち展」に伴い刊行されたもので、近代洋画の大きな流れ、また近代洋画史において重要な役割を果たした九州出身の洋画家たちの作品を紹介。カラー48頁、156頁。頒価1,500円

博物館・美術館報　第 63 号
発行年月日　昭和 59 年 2 月 1 日
編　集　野村綱明
発　行　佐賀市城内１丁目15～23
　　佐賀県立博物館
　　佐賀県立美術館
印　刷　佐賀印刷社